

射場本忠彦 東京電機大学学長 × 吉川弘之 学術顧問

モノづくりをデザインする 大学への期待



東京電機大学学長
射場本忠彦氏



Designer in Society — 技術者は社会との対話を —

東京電機大学(TDU)は学園中長期計画「TDU Vision 2023」を掲げ、理工系大学トップランナーの一員としての評価確立を目指し、積極的に事業を推進している。AI(人工知能)、IoT(モノのインターネット)による急速な社会環境の変化を踏まえ、「モノづくりをデザインする—大学教育への期待」と題し、TDU学術顧問の吉川弘之氏、TDU学長の射場本忠彦氏の対談を実施。将来に向けたビジョンを語った。(聞き手 日刊工業新聞社社長 井水治博 2020年1月16日収録)



東京電機大学学術顧問
日本学術振興会学術最高顧問
産業技術総合研究所最高顧問
吉川弘之氏

井水 かつては世界一とも言われた日本の産業競争力が先進国の下位に沈んでしまっている。強い日本の象徴だった製造業でもそう。最近では「一人当たりの生産性が上がらないので賃金も上がらず、個人消費の低迷から経済の停滞を抜けられない」との指摘もあります。このような現状をどう見えますか。

射場本 まず政治や行政が民間に口を出さず、萎縮してしまっている問題があると思います。民間は「失敗しないように」というマインドに縛られ、チャレンジしようという気になれません。モノづくりの世界でも失敗や挑戦が許されない、何かやるとたたかれるという風潮になっていて、押さえつけられているような気がします。

井水 モノづくりや製造業に直接関係する理工系の大学や学部でも、そのような傾向は顕著だったのですか。

吉川 大学の工学部では機械や電気、建築などそれぞれの学域で、しっかりしたベネチアができています。その分野の多くの人が信奉する伝統的な教科書もあります。これをマスターした教授の教育を受けた人が、その分野で高い能力を持つ専門技術者になりましても、彼らは社会に出ると自ら行動する動機を持ちま

